
桜が咲く頃

浅野勇心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜が咲く頃

【Nコード】

N1640F

【作者名】

浅野勇心

【あらすじ】

振り返るといつも彼女の笑顔があつた気がする。単調な毎日を送る僕には焦燥感だけがしかなかった。そんな時、彼女は僕の前に突然現れる。眩しすぎるくらい彼女は輝いていた。スポットライトを浴び目標に向かってただひたすら走り続けていく。そんな彼女の背中を僕はただ見つめることしかできなかった。

プロローグ 第一話（はじめ）

その日は、ひどい雨だった。

頭のとっぺんから足の先まで、雨に濡れ、全身ぐしゃぐしゃだった。点滅する青信号が視界に入る。いつもなら小走りに渡ってしまうところだが、そんな気力もない。赤信号になってその場に立ち尽くした。

真夜中で、車の行き来も少なく、人の通日もまばらだった。

「バイバイ・・・」といった彼女の言葉が耳の奥でこだましている。ゆっくりと僕の元から離れていく彼女の足取りを何も言えずにただ見送ることしかできなかった。

悔しさと、自分に対するどうしようもないくらいの情けなさで込み上げてくるものを抑えることができず、憚りもなく声を上げてその場にしゃがみこんでしまった。

「情けねーな」

今までの自分だったら、こんな醜態を表す人間を見たらきつと鼻で笑っていたに違いない。

そんな自分も今は所詮こんなものだ。いつの間にか赤信号も青に変わっていた。

バチバチと僕の背中を打ち続ける雨によって彼女との思い出をすべて洗い流してくれるだろうか。ただそんなことを思った。

今日ですべて終わった。彼女をもう二度と抱きしめることもできないだろう……。

いつか、僕の知らない他の誰かに抱きしめられることはあっても……。

最後に見た彼女の横顔が脳裏に浮かんた。止めどなく降り続ける雨が一層激しくなった。

1 .

明菜と何年かぶりに再会したとき、僕はまったくそれが僕の知っている彼女だとは気付かなかった。

ある日バイト仲間のアツシから面白い日雇いのバイトがあるからと一緒に1日付き合ってくれないかとせがまれた。

あまり乗り気ではなかったがアツシに「どうしても頼む」と僕に手を合わせ屈託のない笑顔でお願いしてくるので断り切れなかった。

どちらかといえばアウトドア派というよりはインドア派であり、休みの日くらいは家で借りてきたDVDをのんびりと観たい。しかし、結局アツシに付き合わされて高円寺のとあるライブハウスにきた。

今日、そこで来月発売予定の有名歌手の新曲PV撮影が行われるら

しく、僕たちはそのP.Vに出てくるライブシーンの観客のエキストラというわけだ。

その時ようやくアツシのどうしてもこの日雇いバイトがやりたかったわけが飲み込めた。

確か最近アツシがしきりと「××っていう新人歌手がいるんだけどその子が気になってしょうがない」と熱弁していたことを思い出した。

(2)

薄暗い階段を降りて、色とりどりのポスターが扉や壁のいたるところにびっしり貼りめぐらされていて、正面の扉を開くとすぐに受付があった。

スタッフらしき男がアツシに「エキストラの方たちですか」と無表情に声をかけた。

「あつ、そおつす、エキストラっす」とキャップをとって大きな声でペコペコ頭を下げて答えるアツシに、機械的に「ではこちらに名前と住所、電話番号を記入してください」と僕の方もちらりとみて云った。

感じの悪い奴と意思つつも、アツシがやたらと「テンション上がってくるわ」と連呼して云うのがおもしろくてしょうがなかった。

「でもすぐくねーか、手島舞のミュージックPVのエキストラだぜ」と云いながら、わりとこじんまりとしたライブハウスで50人も人が入ったら汲々状態ですでに人をかきわけていないと前に進めないところを、アツシはずんずんステージ近くに進んでいった。

だいたい、僕はというとアツシとはまったく対照的で今回この会場で新曲のPV撮影をする手島舞という歌手をほとんど知らないに等しかった。

ただ何となくざわざわとするライブ会場内に今か今かと緊張感に満ちた周りの雰囲気圧倒されていた。

「で、手島舞っていうのは有名なのか」と僕が横に目を輝かせまわりをキョロキョロみまわしているアツシに尋ねると、僕の目の前にいるアツシと同じような連中の幾人かが後ろを振り返り冷やかな視線で僕を睨みつけてきた。

アツシも「ヒロ、おまえマジでそんなこと云ってるのかあ、今CMでもラジオでも彼女の曲聞かない日はないぜ」とあきれ顔だった。

「まあ、あんまりテレビも観ないし、ラジオはほとんど聞かないし・・・」と言い訳がましくアツシに云うと、チエツ、とわざとらしくアツシは舌打ちをして頭をオーバーに抱えた。

そんなことをしていると時間になったようで急に照明が落ち、そしてステージの右端から大きな歓声が上がった。歓声の方に視線をやるとパツと、ステージの袖からスポットライトがあたって、手島舞が僕たちに向かって手を振り現れた。

「やべエー、マジで生の手島舞だぞ、ヤベエーヤベエー」と隣で興奮するアツシを見て思わず吹き出してしまった。

「なにがおかしい、どう考えてもこの状況やベエーだろ」ともうアツシは手島舞を食い入るように見つめ「ヤベエー」としか云ってなかった。

ライブハウス内もアツシのように今にもステージ上になだれ込んで行きそうなくらいの興奮状態で、ステージ上の手島舞が笑顔でその歓声にこたえ、そのとなりでマイクをもったプロデューサーらしき、わりと大柄で黒の枠ぶちメガネをかけた顔立ちの整った40代半ばくらいの男が「今から今日、みなさんにやって頂く流れを説明します」と云って今日撮影するPVの内容と僕たちがエキストラとして

手島舞が歌う新曲に合わせノリノリに会場の観客として声援を投げかけるように伝えられた。

手島舞に対する僕の第一印象は、「やっぱ芸能人はきれいだな」といったまったく単純でごく当たり前の印象でしかなかった。

髪はロングで目元が笑うと愛くるしく印象的で、軽く笑窪ができる。ジーンズにＴシャツといったラフな格好だが、スラッとしているが胸の膨らみは結構ある感じでスタイルは良いといったところだ。

僕は彼女が歌う歌声を初めて聞きながらまわりと同じように幾分はずかしさをしのいでノリノリに乗りながらこんな女性と付き合う男性はいつたいどんな奴だろうかと、嫉妬まじりに考えながら手島舞の透きとおる歌声にいつの間にか聞き入っていた。

「ヒロも満更じゃなかったな」とアツシは含み笑いをして軽く肩をあててきた。

「手島舞って結構いけんじゃない」と、平静を繕ってわざとそんなに関心もないように云った。

「どれだけおまえは上から目線なんだよ、てか実際に今超注目されているっちゅーの」とケラケラ笑った。

「そっか、なるほどね」と云って僕も一緒になって笑った。

ライブハウスを後にする頃、すっかり日も暮れていた。明日は僕だけバイトでアツシは休みだからと、「今日は久しぶりに飲み明かそう」とひどく無頓着なことを云う。

アツシに言わせれば、今日生の手島舞を見たという興奮もさめやまずといったところだろう。

僕も最悪、飲み明かしてバイトに遅刻したら、いつそのこと体調がすぐれないと店長に云って明日のバイトはさぼるかと思った。

高円寺には東京に出てきてから、今日が初めてでまったくどこに行っていないか分からずアツシの顔を見てみると、アツシもキョロキョロとあたりを見回しているので「お前も高円寺来たことないのか」と聞くと「当然」と胸を張って答えた。

しばらくぶらぶらと歩き回ったあげく、年期の入ってそんな居酒屋に入った。

居酒屋に入ると数人入ったらもう一杯といったような造りでママさんらしき人が後ろを向いたまま「すいません、今日は貸し切りなの」と甲高い声でいった。

「あつ。そつすか。残念だなー。ヒロ次いこう」と僕が中に入ろうとしたところでヒロはすで

に踵を返していた。

「え、何で。」

とアツシをよけて一旦店の中に入ると「せっかく来て下さったのにごめんなさいね」とママさんがようやくこちらを振り返った。

「あら!?!」

ママさんは僕の顔を見るなり、声を発ししばらく口元を押さえながらじっと僕の顔を食い入るように見つめてきて

「やっぱり、そうだ、ヒロくんでしょ。」

とママさんに自分の名前を呼ばれた瞬間、グルグルと僕の思考回路がめくりめくった。

「誰っ???」

(3)

何でこの人は僕の名前を知っているのだろうと考えていると、

「何だ、ヒロ知り合いか」とアツシがママさんと僕の顔をキョロキョロ見ていた時。

「明菜のおばさん!」

「そうだよっぱり、ヒロくんじゃないの。どうして、何、今はこっちにいるの?」

ようやく思い出した。

「そうだよっぱり、ヒロくんじゃないの。どうして、何、今はこっちにいるの?」

振り返えるなりいきなり僕の名前を云いあてた着物をきて髪をこぎれいにまとめたその人は、明菜のおばさん。

おばさんというか明菜の母親だった。

早瀬明菜。

中学を卒業するまで、僕と明菜は同じマンションの同じ階の隣どろしに住んでいた。

幼稚園から中学3までの間ずっと同じ学校に通っていた、いわゆる幼馴染だった。

明菜の父親は明菜がまだ幼稚園の年長に上がる前に交通事故でこの世を去り、母親一人で明菜を育てていた。

明菜の母親は夜はスナックで働いて外見は派手だったが、とても気さくで素敵な人だった。

いつも明菜の家を自分の家のように行き来していた僕をととても可愛がってくれた。

そんな訳で明菜の母親が大好きだった。

自分の母親には絶対秘密にしていたことでも明菜の母親には相談していた。

クラスに好きな女の子ができた時も一番最初に打ち明けたのも明菜の母親にだった。

中学に上がる前まで明菜はショートカットで身長も低くかった。

そのくせスポーツはよく出来て女子バスケット部のキャプテンとしてチームを県大会ベスト4に導いた。

そして、クラスの男子からはなぜかモテていた。

僕は明菜のどこがよかったのかさっぱり理解できなかったけど、とにかくかわいかったらしい。

今はどうだかわからないが……。

いや、母親に似ていたといったら似ていたからきつと美人になっているに違いない。

そうであつたとしてもあんまり実感はわからないものだ。

それがやはり僕と明菜との空白の時間の長さに違いない。

いつも二人一緒に遊んでいたほど仲がよかったのに……。

中学に上がってからはずがに周りの目が気になりだし、いつしかしょっちゅう行き来していた明菜の家にも次第に寄り付かなくなつた。

明菜の母親にはたまに学校の帰り道に偶然会つて挨拶を交わす程度になり、時はそのまま流れた。

中学をまもなく卒業となつた頃、「ヒロ、明菜ちゃんのこと聞いた？」と母親がスーパーから帰ってくるなりいった。

「なんか明菜ちゃんのお母さんにスーパーでばったり会つて聞いたんだけど、近くに東京に引越すんだってよ……。」

「ねえっ。聞いてる？」

僕の方をのぞきこむように母親は、「さみしくなるね」と意味深な含み笑いをした。

「そうなんだ」

と母親のその意味深の含み笑いの意図を感じとつた僕は素気なく答

えた。

「見栄張っちゃってさー・・・。」

「はいはい。」とはいったものの・・・。。。

正直さみしかった。

最近ではろくに会っても話を交わしたりしなかったけど、やっぱり気にはなった。

明菜はあの時僕のことをどう思っていたのだろうか・・・？

僕は・・・。。。。。

結局何も詳しいことを本人から伺うこともできず、明菜は東京というテレビや雑誌でしか知らない未開の地に静かに僕の元から去って行った。

その明菜の母親が数年ぶりに僕の目の前に偶然こうして現れたので、さすがにすぐには思い出せなかった。

「明菜のおばさん」

「いやー大きくなって、おばさんびっくりしちゃった。今は東京に遊びに来ているの？」

「うわー、マジで明菜のおばさんじゃない。ここで働いているんですか？っていうより僕は今こっちで1人暮らしています。」

につこりほほ笑んだ顔は歳は確かに年齢分、皺刻んでいたが、やっぱり今もきれいだった。

「そうよ、ここは元々私のお兄さんの家だったんだけど、昨年急に亡くなっちゃってさ。」

おばさん別で働いていたんだけど、頑張ってた分ある程度はお金貯まったからね。パーっとここを改装して小さいけど店開いてるのよ。」

「へー。すごいじゃん。やっぱり明菜のおばさんはやる時は豪快だなー、昔から・・・。」

明菜のおばさんはアハハっと笑いながら「そう。おばさんはやる時は威勢がいいんだから。」
と胸を張って答えた。

「知り合いか？」

こそこそ声で話しかけられて初めてアツシの存在を思い出した。

「ああ、わりー。地元の幼馴染みのおかあさん」

明菜のおばさんに紹介するような恰好でアツシを前に引っ張り出し、照れ笑いをするアツシに明菜のおばさんは「どうも、ヒロちゃんがいつもお世話になってます」とお辞儀をしてくれた。

そんなこんなでまだ予約の団体が店にこない間、「ちょっとしかないけど、なにかつまんでいきなさい」と明菜のおばさんに促され、アツシと僕は少しの時間ここにいることにした。

「ところで、その予約の人たちは何時に来るの？」と僕の質問に。

首をひねりながら「うーん。どうかしら……時間がいつも読めないのよね。色々あるみたいで……。」明菜のおばさんは返事を返した。

時間が読めない客なんて、どんな客だろうか？マークを頭に浮かべながらとりあえずゆっくりしていこうと僕はタバコに火をつけた。

明菜のおばさんこうして面と向かって話するのは数年ぶりになるが、あっという間に打ち解けてしまった。

なんていうのだろうか……、時が過去に向かってタイムスリップしたみたいに昔の感覚に戻っていった。

深い安堵感と懐かしい雰囲気は僕のまわりに立ちこめた。

しかし、心の中である一つの質問だけが、決して僕の口を割って出てこない。

出てこないというより、アツシのいる手前この質問をしたら確実に突っ込まれることだけは確かであったから……。

明菜のおばさんも僕のその空気を察してか決してその本題には入ろうとしなかった。

1時間くらい経った頃だろうか。そろそろ予約の客も来そうな感じがしたので、カウンター下のアツシの足をこずいた。

「痛てエーな。なんだよー」とふくれつつらにアツシが僕の方を向いた瞬間、外が急に騒がしくなつてガラガラつと扉が開いた。

「おかあーさん、ごめエーん！！だいぶ遅くなっちゃったよー！」

若い女性の声とともに、複数の声が勢いよく一斉になだれ込んでくるように入ってきた。

「あれ、今日は貸し切りじゃなかったっけ？」

と暖簾をくぐりながら笑い皺をいっばいつくつたいかにも人のよさそうな、そのてんビシツとしたスーツ姿に、髪を後ろに流した短髪で歳は40後半といったところの男が僕とアツシを見て、明菜のおばさんに声をかけた。

「じゃあ。そろそろ・・・」と云つて、明菜のおばさんに目で合図して、僕はアツシの腕をとり早々に店から引き上げようとした。

「あつ」

とアツシは扉の方を見て口を開いたまま僕の腕を逆に引っ張り返した。

「なんだよ？」とアツシが引っ張り返してきた反動で少しよろめいた。

僕は何気なくアツシの視線の方に目をやると、そこにはさつき眩しいくらいのスポットライトを浴びてステージ上で歌っていた手島舞が僕の方をじっと見つめて立っていた。

「ヒロ・・・!?!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・??」

彼女の口から僕の名前がなんで出てきたのか、一瞬理解できなかった。

明菜のおばさんの顔を見上げると、にっこり笑って僕と彼女のこの異様な空間をいかにも楽しんでいるかのように見ていた。

アツシはというと・・・・・・・・、なるほど、手島舞を凝視して完全に固まっていた。

つまり・・・・・・・・手島舞が・・・・。

明菜のおばさんが彼女に声をかけた。

「明菜、今日は偶然ヒロちゃんがうちにひょっこり顔を出してくれたのよ」と。

・・・・・・・・早瀬明菜で・・・・、

早瀬明菜が・・・・手島舞・・・・ということとは・・・・、

僕が今日、ステージ上で芸能人はやっぱりきれいだな、なんてコメ

ントしていたのは
すっかり大人びてきれいになった明菜に対していったコメントとい
うことだ。

「・・・!!」

「明菜だったのかよ」

僕の第一声だった。

(4)

2 .

扇風機からなまぬるい風が流れてきて、余計に暑さを増長させている気がしてならない。

近くの図書館にいつて、クーラーの効いている部屋でレポートを仕上げるといつてもなんだか行くのが面倒で結局自分の家にいた。

タオルを頭に巻いて「そうだった!」と、

冷凍庫から、キンキンに冷やしておいた冷えピタを取り出しおでこに貼った。

幾分涼しくなった気はしたがすぐにそんな感覚は消えてしまった。

本当に暑い日が続いて困ってしまう。

バイトは今週休みをもらっているし、とはいっても真面目にレポートを仕上げる気にもなれない。

暇だ。

「あゝあつ」と深いため息まじりにそのまま仰向けになって寝ころんだ。

網戸越しに、蝉の合唱が繰り広げられている。

「夏か・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

あれから2ヶ月が過ぎた。

携帯のカーソルを明菜の番号に合わせる。

早瀬明菜。 090 - xxxxx - 〇。

文字を何度も目でなぞりながら、また深いため息をついた。

はつきりいつてなにも考えることはできない。

かなりの衝撃を受けたのはいうまでもない。

何が衝撃かって・・・・・・・・・・。

悪い意味とは決していつてない。

2週間前、手島舞を、いや早瀬明菜を抱いた。

つまり・・・・・・・・・・、結ばれた？といっておこうか。

暗がりの中だったが、月の光がかすかにカーテン越しに光をこぼし、明菜の裸体をうつすらと照らしだしていた。

思ったよりも胸の膨らみが大きく、彼女のそれに軽く触れたとき、ぴくっと彼女は後ろに引くしぐさをとった。

肌も透き通るようにきれいで、子供の頃の擦り傷をいっぱいつくつて僕と一緒に遊びまわっていた頃など想像すらつかないほど、明菜はきれいだった。

終始無言のまま、明菜は僕のリードに従いつつ、甘い吐息だけが僕の耳もとでこぼれおちていた。

一つになることでお互いの時間の空白を一気に埋めていけるような気がした。

よく時間がこのまま止めればいいのといつくさいセリフがあるが、そのときは本気でそう思った。

「このまま時間が止まってしまえばいいのにと……………」

……………今思えば、もしあの時明菜と再会することがなければ、どんなにお互いにとって幸せだったことだろうか。

お互いに思い出のまま、大切な存在のままの方がむしろよかったかもしれない……………。

今更、何をいってもしょうがないのは知っているはずだが、後悔の念しかない……………。

彼女とその日の晩別れてから、明菜からは2週間過ぎても電話もメールも何も連絡がなかった。

打ち切り報告

短い間でしたが、筆者の小説を世に提示するのにまだ熟考する必要があることを痛感し、この小説を打ち切ることになりました。

数少ない読者の方々一読頂き大変光栄に思います。

3日間打ち切りのコメントを載せた後【桜が咲く頃】を削除致します。

筆者のひとり言

「19歳の頃、青春を謳歌するどころか、目の前が真っ暗で現実との葛藤の中で人生への活路を真剣に探しさまよっていた。

辛かった。

自分よりもつと不幸な人が当然世の中にはいろいろいただろうが、未熟な自分には全てが真っ黒に思えた。

何度人生を悲観してまわりに助けを求めたことか……。

肉体的にも精神的にぐちゃぐちゃだった。

辛かった。

でも何とか生き抜いた。

後悔も何度もした。

過去に何度も振り回された。

でも何とか生き抜いた。

22歳の頃、筆者の血縁がいなくなった。

今もいないままだ。

いったいどこで何をしているのだろうか？

筆者にとってはとても大切な存在だった。

心の支えの一部であったことが時間が経つにつれはつきりしてきた。

後悔していることは確かで、時々無償にどうしようもなくなる。

元気でやっていますか・・・。」

「・・・」

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1640f/>

桜が咲く頃

2010年10月28日08時21分発行